四年ぶりの被爆地・広島訪問

――被爆体験・戦争体験の継承を考える――

松岡　勲

四年ぶりの広島だった。前回は靖国神社遺児参拝の資料を探すために訪れた。今回、広島の修学旅行を取り組んで来られた横浜の元教員の赤田圭亮さんと、広島の児童文学者、中澤晶子さんの企画で、広島の被爆体験を聞くツアーに誘ってもらい、喜んで行くことにした。出発する前に強く関心を持っていた広島の被服支敞の保存が決定したとの報道があり、四年ぶりの広島行きに関心がいや増した。

中国管区司令部防空作戦室

五月二四日、波多野愛子さんが、被爆者故岡ヨシエさんの「伝承講話」をされた。

「伝承講話」とは、被爆者の方々の高齢化により被爆体験を語る方が激減している中、被爆者に体験を語って頂き、被爆体験伝承者が、それを記録し講話という形で人々に伝えるという、広島市の新たな取り組みだ。

お話を伺う前に事前学習として、広島護国神社の左手石垣の地下にある中国軍管区司令部の防空作戦室跡を訪ねる。（現在、崩落の危険ありということで閉鎖）

当時一四歳の岡さんは、比治山高等女学校三年。学徒動員として作戦室に配属され、八月六日にここで被爆された。

原爆投下の日、外部（福山通信隊）に「原爆投下、ヒロシマ壊滅」を最初に伝えたのが岡さんだった。防空作戦司令室は、情報室、通信室、指揮連絡室、作戦司令室の四つに分かれていて、学徒動員された比治山高等女学校生徒九〇名が交代で勤務をした。岡さんは、指揮連絡室で仕事をしていて被爆した。九〇人のうち亡くなった生

徒は六七人だった。岡さんは、当時の様子を克明に伝えている。（午後の学習会で岡さんの証言の朗読があり、当時の様子がありありと感じられた。）

岡さんは二〇一七年に亡くなり、その数か月前に波多野さんに自分の体験を被爆体験のない人に伝えてほしいと依頼していた。昨年、中澤晶子さんは、『私がいたところ　14歳のひろしま　ワタシゴト・2』（汐文社刊）で防空作戦室を取り上げ、あとがきで岡さんとの交流について書かれている。（後で触れる「似島」についても書かれている。）

フィールドワークでは、中澤さんに、大本営跡をはじめ、広島城全体にたくさんの陸軍の施設が置かれていたことを詳しく説明していただいた。事前に読んだ堀川恵子著『暁の宇品　陸軍船舶司令官たちのヒロシマ』（講談社）でも詳しく展開されていたので、思い起こしながら聞いた。

午後二時、お気楽会議室広島紙屋町で、波多野さんのお話を伺った。ＮＰＯ法人広島宗教協力平和センター（ＨＲＣＰ）で活動されている方だ。波多野さんから岡さんの来歴などの紹介、さらに高校生が作った岡さんの証言をもとにしたＣＧの上映（高校生が制作したこのＣＧは彼らの関心のありようと臨場感がよく現れていて、伝承の方向を示していた）、最後に、松井理江さんによる、岡さんの証言の朗読から構成されていた。

今日のお話から、岡さんが伝えようとしたものが新たな視点を付け加えたものとして立ち上がってきた。被爆体験者で、証言ができる方々の多くはすでに九〇代を越え、多くの方が亡くなっている。私が修学旅行でお世話になった方々も鬼籍に入られている方が多い。さまざまな形で被爆体験のない者による伝承（継承）を探っていくことが課題になっていると思った。私見だが、「伝承」と言えば、民話の伝承を思い起こさせるが、今回聞いたお話は、語り手の平和と戦争の考え方が新たに加わった「継承」のように感じられた。質疑も含めて二時間近く中味の濃いお話が聞けた。この後、江戸時代の浅野家の庭園、縮景園に案内していただき、被爆当時に縮景園に避難してきた被爆者の様子と被爆樹木などのお話を波多野さんに続けてお話しいただいた。大変充実した一日だった。

軍都広島を支えた似島

二五日午後二時、似島学園桟橋で似島歴史ボランティアガイドの会の会長宮﨑佳都夫さんが出迎えてくださった。同行は赤田さんと大阪からの二人の合計三名だった。

宮崎さんは軍都広島を支えた似島の戦争や原爆についての調査をされてきた。この日最後に訪れた似島平和資料館建設も宮崎さんが中心となり、作られた。見せていただいた似島村史の大部分は、宮崎さんのお父さんが企画し、宮崎さんが執筆されたものだ。個人の営為でこれほどまでの歴史書を作られたことに感嘆した。私自身が父親の戦死の意味を問い、戦後の靖国神社遺児参拝の歴史を調べてきた経緯があるので、宮崎さんの仕事に強い関心を持った。今、宮崎さんは新編の村史を作成中とのことなので、完成したら入手して、ぜひ読みたいと思った。

さて、フィールドワークは、炎天下に徒歩での大変さを予想していたが、宮崎さんが自動車を用意してくださっていた。高齢の私は足腰に自信がなくなっているので、大変　有難かった。似島は、日清・日露戦争から太平洋戦争まで検疫所や俘虜収容所、弾薬庫などの軍用施設がたくさん作られた所であり、半日かかって宮崎さんに案内していただき、詳しい説明を受けた。

日清戦争では朝鮮や台湾方面から、また日露戦争では満州や朝鮮方面から帰還する将兵の検疫所が作られた。ともに兵隊が出兵する桟橋、帰還する桟橋の二つが作られ、上陸した将兵の検疫が行われた。また第一次世界大戦時には、日本は山東半島・チンタオでドイツ軍と戦い、一九一八年には似島に五〇〇人以上の捕虜を収容することになった。一九一九年に広島県物産陳列館（現原爆ドーム）で捕虜たちが作った工芸品や食品が展示された。似島がバウムクーヘン発祥の地とされるのは、収容所の中でドイツ人捕虜のカール・ユーハイムが日本で初めて作ったことによる。後藤新平が指揮して完成した検疫所は、満州事変、日中戦争、太平洋戦争と大陸へ侵略する日本帝国主義のアジアへの展開を支え続けた。

一九四五年八月六日の原爆投下後、似島には市中で被爆した負傷者が続々と運ばれ、救護所に指定された検疫所等には一万人以上の負傷者が収容された。米軍は攻撃の手を休めず、八月一五日に至るまでグラマン機による銃撃が続いた。

戦後の似島の歴史は、遺骨収容の歴史だった。一九四七年に一五〇〇体の遺骨を発掘し、広島市戦災死没者似島供養塔の墓碑を立て合祀した。一九五五年、二〇〇〇体の遺骨を平和公園の広島市戦災死没者供養塔に合祀した。一九七一年には似島中学校グランド（元馬匹検疫所）から五一七体（推定）の遺骨を発掘し、さらに一九九〇年には、馬体焼却所から骨片四〇点が見つかった。（一〇〇体の遺体を火葬したとの証言があるが、遺体を埋めたとされる地下壕からはいまだ発見されていない）二〇〇四年には

一九七一年の遺骨発掘場所付近から推定八五体の遺骨が発掘された。

その都度、車を降りて説明をいただき、休憩を交えて約二時間半のフィールドワークだった。最後の似島平和資料館で、資料館開設時の話と運営の苦労話など総括的なお話を伺った。広島が日清・日露戦争、アジア・太平洋戦争を通じて軍都として拡大してきた歴史を似島のフィールドワークで認識できた得がたい体験だった。

今回の再訪で、広島がより自分のもとなって蘇った。今回の企画をしていただいた赤田圭亮さん、中澤晶子さん、フィールドワークの案内をしていた波多野愛子さん、宮﨑佳都夫さんに感謝申し上げる。またこの文章を書くに際して、赤田さんのブログ「keisuke42001」を参考にさせていただいた。

次回は秋頃、再度広島を訪れたい。その際は是非とも保存が決定した被服支敞を見学したい。また私のテーマである靖国遺児参拝に関わって広島でのケースの聞き取り調査をしたいと思っている。

原爆被爆者慰霊碑（似島）

馬体焼却所跡（似島）